桃源瑞仙について

On Tōgen Zuisen

蔭木英雄

旧著『五山詩史の研究』第四章で、筆者は五山文学第四期の特色を、(1)五山文学僧は応仁の乱を避けて多く地方に散ったに拘らず、歴史的地域の社会意識を作品に反映せず、徒らに閉鎖的団欒に耽ったこと、(2)禅詩（時には「蔬荀の気」と誹謗されたが）ではなく雑信仰の詩境に遊んだこと、(3)第三期の艶詩的傾向が一そう強くなったこと、(4)『花上集』『錦繍段』『北斗集』等の撰集が多く編まれたこと、(5)前期に続き『史記抄』『天下白』等の抄物が盛行したこと、の五点で捉え、五山文学の衰退期とした。そして希世靈彦をはじめ十三人の文学僧について論じたのである。いま読み返せば、冷汗三斗の未熟な論が多いが、文学史的把握はまだ訂正する必要はないと考える。

しかし、十三人の中に、『史記抄』『百丈清規抄』『三体詩抄』『百衲襖』等を著して、(5)の特色を発揚した桃源瑞仙（一四三〇～一四八九）を含めなかったのは片手落ちであった。

桃源瑞仙については、大島利一「桃源瑞仙史記抄を読む」（『東方学報』昭一四・五）、新村出「桃源瑞仙の事蹟」（『史学雑誌』明三九・十一）、寿岳章子「史記抄の文章」（『国語国文』昭四一・五）等の研究があり、筆者も「桃源瑞仙の史学」（『東洋文化』昭四五・四）で彼の学統及び学風について述べたことがある。本稿ではさらに視野を広げて論じてみようと思う。

桃源は『百衲襖』に、自己の出自や家族について、次のように断片的に書き記す。

○顧余四十年、于江之西、于湖之南、于洛之東西、以吟風嘯月為業焉。然至和歌不得措一辞。（中略）[A]亡父年登居士、亦以二此藝一（和歌）一鳴者也。〈巻十五〉

○（文明八年正月）廿四日之夜、[B]夢二先考年登居士一。（中略）居士生而事其君、則忘身忘家、忠肝義膽碑于人口。[C]今也極氏之家不レ絶如レ縷矣。（中略）[D]有二二子一、其季早党於賊、不足言耳。其仲乃自丁亥乱至乙未、雨沐風櫛、不為無功労。去歳官軍之敗、不守其節、而又帰于賊。〈巻十八〉

○疇昔之夕、夢与季玉詣伊之神廟。（中略）[E]余幼年従二斉岳及先年登居[F]士一而詣者数矣。[G]余之所レ祈二于神一者、唯以二母之遺意一、欲レ遂二出家本志一焉。（中略）従レ立二此願一以降二十年之間、[H]毎歳必詣。（中略）余

与レ神一也。神与レ仏亦一也。〈巻十九〉
○（文明八年）孟夏廿九日、[I]先考三十三周之諱。〈巻二十一〉
○（文明八年）蜡月初五日（中略）[J]萱堂即後母也。非レ所レ生也。不面者良久、於義不可也。然余有義。[K]与二孟八弟一不レ可レ通者。八弟与二萱堂一同居、故不レ能レ升二其堂一。遺憾為不浅矣。不敢以非所生而疎之。[L]蓋余二歳而失レ母焉。[M]自非後母之生二二男一、則殆乎妨余之出家之志焉。使余帰釈氏而至今日者、[N]後母之恩也。〈巻二十二〉

以上のほか、桃源の家族を知る資料として、『翰林葫蘆集』と『宗派目子』の文章がある。

○岩桂慈昌優婆夷、如梅無恙、似菊有芳、通家田里野村市村。懐朱陳嫁娶之始、択婿江州南郡北郡、擅和漢詠歌之場。落髪作尼一女子、結髪奉主両侍郎、恩越萱親、[O]育二桃源一致二之長老職一。（岩桂慈昌禅定尼預修秉炬仏事）
○江州市村慈眼菴頭松蔭慈鶴尼首座、幼拝天英禅師為師、命之日慈鶴。[P]族兄桃源師字之曰松蔭。（松蔭慈鶴尼首座預修秉炬仏事）
○前住真如新命相国、[Q]諱保字有節（中略）与二桃源一為二同姓氏族一。（宗派目子）

桃源の父は俗名は不明だが年登居士と称し（A・B）、京極氏の忠臣で（C）、和歌を嗜み（A）、敬神の念が篤かった（F）。桃山時代に鹿苑僧録になった有節瑞保と同族で、有節は『鹿苑日録』に、

備州空月々忌を営む。（天正十九・三・十一）
予も郷里市村に赴き一宿す。（天正十九・十一・廿一）
二親の月忌を営む。（文禄元・正・十一）

と記している。思うに桃源と有節は、現在の滋賀県愛知郡愛知川町大字市に拠った市村氏[1]であったらしく、市村には菩提寺慈雲庵があった。

生母は桃源が二歳の時に死去し（L）、幼ない桃源兄弟は岩桂慈昌尼という近在の女性に育てられ（O）、妹の慈鶴尼も後に天英周賢を師として仏門に入っている。岩桂慈昌尼も詩歌に明るく、後に二夫にまみえた人であったらしい。

父年登居士は後妻を迎え二男を設けたが（D・M）、この異母弟は応仁の乱中に相ついで敵方の西軍に奔ってしまった（D）。父は幼ない桃源と斉岳均公とを連れてしばしば伊勢神宮に参詣し（E・F）、文安元年七月、桃源が十六歳の時逝去した（Iより逆算）。

桃源瑞仙は出家の動機として、亡母の遺志により伊勢神宮に出家を祈った事（G）、異母弟と同居していた継母が彼の志を妨げなかった恩（N）の二つをあげている。前者に関して彼は、

此（出家）の願を立てしより以降二十年間、毎歳必ず（伊勢神宮に）詣る。余と神と一なり。神と仏とも亦一なり。

と述べている（H）。まさに神仏一致の思想である。だいたい、王法仏法両輪論とか、儒仏一致、詩禅一致などが声高く唱えられるのは、殆んどその片方が衰退している時である。ある時は自己の奉ずる道を他によって補強し、ある時は自己の道に専念せぬ弁護となり、また妥協的迎合的態度が底流となって何々一致論が叫ばれるのである。神仏一致論も桃源個人のものでなく時流の産物であった。[2]

岩桂慈昌尼に育てられた桃源は、次に（或は同時期に）市村の慈雲

庵を開いた斉岳慈均尼に養われた。この人は、文明十九年正月七日が三十三回忌に当るので、康正二年、桃源が廿六歳の時に死んでいる。『補庵京華新集』に、

斉岳均公首座、夙乗地上本願力、誓成女中丈夫児。（中略）養桃源猶如子、（中略）通玄峰頂満目青山、妙齢隷名京寺、（中略）胡蝶夢中有三十二歳。

とあり、若くして仏門に入り、三十二歳で亡くなったのである。臆測をたくましくすれば、この斉岳慈均尼が桃源の継母で、年登居士の没後に京の禅寺で剃髪し、夫を弔う為に市村に慈雲庵を開いたのではなかろうか。

さて、近江の市村で幼少期を送った瑞仙は、上洛して相国寺内勝定院（絶海中津開山）の明遠俊詰に参侍し、横川景三や萬里集九と同年に萬年山相国寺の文雅のグループ（これを友社と称する）に入った。(3) 瑞渓周鳳の「次韻仙童（＝瑞仙）試毫寄令師明遠和尚」や東沼周嚴の「賡韻桃源俊少試毫」はこの頃の作品で、両者とも宮・風・紅の韻字を用いている。『流水集』所収の東沼和尚の作品をあげておく。

三山詩動大明宮　彩筆回春祖父風　五十六翁顔再嫩　小桃源畔映繁紅

勝定国師の「三山詩」は大明宮をゆるがし、（桃源の）美しい筆は祖父（勝定国師）の詩風を甦えらせた。五十六歳の明遠翁の顔は再び若がえり、桃源少年のそばで紅桃に照り映えている。

起句の「三山詩」とは言うまでもなく、絶海中津が洪武帝の勅命によって作った「応制賦三山」をさし、大明の皇帝がこの七絶に和した話は長く禅林に語り継がれた。絶海―明遠―桃源の法系の人はみな作詩に秀れ、明遠和尚が五十六歳というのは足利義教が殺された嘉吉元年に当り、瑞仙は十二歳であった。当時は、〃四書五経ナントノ俗書ヲ読ムニハ、世ニ堕落法師ノ様ニ云タカ、其後ハ史記漢書ヲ読タカ、今ハソレヲモトツテオイテ、詩集文集ヲ本ニ習ソ〃（『百丈清規雲桃抄』）というように、滔々と詩文製作に趨る時代だったのである。

これより桃源少年は仏道と学問に精進する。詩文集や『蔭涼軒日録』など、当時の禅林を語る記述に、坐禅の記事が少ないのは奇異なことで、それだけ禅風が衰頽していたのだが、桃源は、『百衲襖』に、〃家貧無油可焚、禅罷便仰臥而已矣〃（巻十二）〃禅餘天寒稍甚〃（巻廿二）、〃仲春稍温。自今日又打板坐禅。而不憂荘園之不登、而憂無一人参得箇狗無話者焉〃（巻廿四）と、荘園の年貢が滞ることは心配せず、趙州無字の公案に参得する者が一人もいないことを憂いつつ、江州永源寺で坐禅に励んでいる。従って、少年時代も求道に打ちこんだ事は想像するに難くないが、時代の流れには抗し得ず、参禅一筋の少青年期ではなかった。前掲の傍線Aの前の文章で、桃源は文明七年四十六歳冬まで四十年間、和歌は一首も作らなかったが、詩偈は作り続け吟じ続けたと述べているので、逆算すると六・七歳の頃より詩を作り始めているのである。

桃源瑞仙は文学僧というよりは学問僧としての方が有名である。まず彼の姿勢を理解しておこう。彼は、〃凡言学者、六経三史為体、諸子百家為翼。是以見所未見之書、無不通者也。〃（『史記抄』周本紀）

と、易・詩・書・春秋・礼・楽の六経と史記・漢書・後漢書の三史を学問の本体とし、諸子百家をその補助学と考えていた。ところが近頃は、〃近世之学則異于此、大抵率逐末而棄本者、什八九矣。蓋便于製作吟咏也。〃（同前）と、ただ詩作に利用する為に枝葉末節の学問をする者が多くなった事を歎いている。さらに、〃学仏之徒、以幾十年、不見儒書為本也。不堪一笑。〃（『百衲襖』十八）と呆れはてている。そして、〃経は山林中の花、史は園圃中の花、古文の高きものは欄檻中の花、その次の古文は盆盎中の花、下の文は瓶中の根無し花〃と明の曽鼎の語を引用したあと、〃今之以詩文鳴者、不瓶花幾希矣。（周本紀）と、応仁・文明期の五山詩僧を、花瓶に挿した切花に喩えて、

余の斯の抄（史記抄）を作りし所以なり。

と、『史記抄』執筆の目的、ひいては経史学の目的を闡明にしているのである。

A大抵率志在博識者、拙于著述。B心在著述者、其才浅矣。蓋古今之常也。為学之徒、不可不知矣。（『史記抄』扁鵲倉公列伝）

〃古今の常〃とはいうものの、傍線Aは著述の少なかった牧中梵祐（史学の師）を惜しんでいるのであり、Bは自戒の語である。彼は浅学を自覚し、多くの師に就き広い読書に努め、牧中が講じなかった「扁鵲倉公列伝」も、『医書脈訣』などの医学専門書を博捜し参照して、研究執筆したのである。

桃源瑞仙の史学については既述の如き諸研究があるので、本稿では六経のうち『易』についてだけ考察してみる。言うまでもなく、彼の易研究は『百衲襖』に集約される。桃源はこの著の中で自己の研鑽過程を追憶し、応仁・文明の戦況の巷聞を書きとめ、さらに折々の所懐を克明に日記風に記しているので、近江在住時代の彼の研究生活を知る事が出来る。

余二十年前、有意学易。故売書郎嚢底、凡有易之書抄、則無不収取焉。（巻八）

桃源が易研究に志したのは廿五歳頃であった。それは、〃嗚嗟乎、学之（＝史記）之日已餘二十年。芒髪禿歯欠、無所成者、一箇閑道人、不後嬴得耶。文明八年丙申中冬々至之後二日書。〃（『史記抄』扁鵲倉公列伝）とも記すように、『史記』を学び始めたのと同時であった。彼が廿五歳即ち康正元年の閏四月七日に師の明遠俊喆は示寂し、翌年正月七日には彼を養育した斉岳慈均尼が没していて、この頃は彼の生涯の一転期であったのである。彼は書籍商から(4)『易』の注釈書を買い漁り、又、人に借りて書写に没頭する。〃人各有癖。元凱（晋の杜預。杜甫の祖先）之癖于伝也。阮孚之癖于屐也（『蒙求』に所出）。或有癖山者、或有癖銭者、余之癖者在書也。可笑。（巻廿一）とあるように桃源は本気ちがいであった。癖といえば月舟寿桂は、〃万年桃源老人、蚤歳有癖於遷固之書〃（『幻雲文集』漢水餘波序）と、『史記』『漢書』気狂いであった事を記す。桃源が『百衲襖』著述の参考にした書名を順不同に掲げると、『易鑑明断全書』（邵雍）、『易伝』（程頤）、『五経正義』（孔穎達）、『易学啓蒙』（朱熹）、『程朱易解』（董楷）、『命期訣』（聖徒明麟）、『命期秘抄』（三善行康）、『易注』（王弼）などである。

彼が少青年時代、誰から直接『易』を学んだかは不明で、芳賀幸四郎氏は竺雲等連や清原業忠についたのではないかと推定しておられる

が、確かでない。(5) 戦乱を近江に避けていた時、永源寺の柏舟宗趙に学んでいる。柏舟は永享十二年、足利学校庠主快元に就き七年間、ついで武州箕田の希禅に就いて『周易』を学び、『周易抄』を著した人である。当時、易を家学として伝えた僧に栴室周馥(6)があり、桃源はこの人から暦法算術を習っている。彼は、

挙足下足、屙屎放尿、苦楽順逆、道在其中、則日用不離、四威儀中、無作而作、無説而説。山青水緑、一易也。露往霜来、一大極也。(『百衲襖』十二)

と、足のあげおろしから放尿まで、又、自然の山水も四季の推移も易・大極ならざるはなく、行住坐臥すべての中に道(易の真理)があると説く。まさに易に没頭したのである。しかし二六時中『百衲襖』執筆に専念することは出来ず、史記講、東披講、山谷講、そして碧巌録講に時間が割かれ、その上燈油も乏しく、

余之於此書(易)也、始甲午(文明六年)秋、而及丙申(文明八年)臘。古人三年一経之言不誣矣。(中略)若其専於此、則雖一年可也矣。何労之有。

と、「もし易抄執筆に専念し得たら、一年で完成出来たであろうに」と歎いている。時代も学問研究に没入出来る社会ではなかった。

惣而易ハ損ハ十、得ハ六ト云々。大概蒙罰也。桃源モ易ノ罰ニテ卒ト云々。世人風分(聞)也。(『聾盲記』)

と巷間で言い伝えられている。現代でも「当るも八卦、当らぬも八卦」と言われているが、室町時代にはそれ以上に畏怖の念を雑えて易は受け取られていたようである。

既に述べたように、桃源は詩作に耽る禅僧に対し批判的であった。文明八年正月、修正の行事を記したあと、次のように歎く。看経のあとは横臥せずに長時間坐禅に励むのが当然であるのに、近頃の門弟どもは仏道を志さず、学問(それも六経三史でなく詩文)のみを考えている。彼等に坐禅を強要しても、かえって無明を長ぜしめるだけだ。

看経罷、諸方長坐不臥。而此間則不然。二三子其志唯在于学、而不在于道。若強使之、則長他無明而已矣。

若者の堕落を指導者層が歎くのは各時代に共通し、またその若者に妥協するのも亦古今同様である。〝今叢林喝食、間過丁年(廿歳)而未弁詩律平仄者十而八九矣。(『臥雲日件録抜尤』宝徳元・八・廿二)と瑞渓周鳳が歎息してから約三十年を閲している。桃源は毎年正月一日から一日に一題詩作させ、不良の作品は地に投げて辱かしめ、十日間続けさせた。(7) そして、

是を以て第十日に至れば、四威儀中詩に非ざるなく、著衣喫飯皆詩なり、屙屎放尿皆詩なり。(『百衲襖』十八)

と記すに到る。結局、桃源も時流に抗し得なかったのである。〝三更を過ぎしも、淑子(門弟の梅甫□淑)谷詩(黄山谷の詩)を誦し前に在り。喜ぶべし。毎に此の如くんば則ち其の学成るべし〟と手放しで喜んでいる。彼は某尼女の秉炬語を作製して得た二千五百銭で『坡詩魁本』を購入して、〝実奇代善本也。珍翫不釈手。余老矣。得之亦何所用乎。(中略)余之癖者在書也。可笑。〟と喜び且つ苦笑している。傍点の語によれば飯高山で膨大な蘇東坡詩集を全部講じた後、

（この聞抄が『蕉雨餘滴』）この本を入手したのであろう。

このあたりで桃源瑞仙の人となりを見てみよう。〃我を育てし者は父母に非ずして師（桃源）なり。識る者は鮑叔に非ずして師なり〃（「呈桃源書」）と述べる彦龍周興は、別の書簡で、

慈誨懇切にして感泣已まず。罵の一字は終身肝を鏤つ。（「啓勝鬘書」）

と書き送り、蘭坡景茝は文明十七年十月十三日、南禅寺入院に際し、謝語として、

桃源西堂和尚、果毅をば性と為し、温和顔に在り。（『雪樵独唱集』）

と述べている。桃源は内に剛毅を蔵し、外は温厚で情の厚い人であったようだ。遣明使の人選が難航していた時、

愚（亀泉）桃源に問ひて云く、「東府より正使居座の事を書き立て、早々に進ずべき命あり。和尚を以て正使と為すは如何。十手の指す所なり」と。桃源云く、「死すとも渡らじ」。（『蔭凉軒日録』長享二・二・廿三）

と頑固に拒否した。正使には崇寿院主仲璋光珪が充てられ、そのために崇寿院後住を決めねばならなくなる。

（亀泉白す）「崇寿院主は御相伴衆たり。其の仁才を択びて住持と為すべき事然るべし。然らば桃源和尚尤も然るべけれど、定めて固辞すべし。然りと雖も上意として堅く仰せ付けらるれば然るべし。」相公曰く、「諾々。」（『日録』同年・三・廿三）

後に崇寿院主に春陽景杲が任ぜられた時、亀泉集証は、〃桃源の事は太だ情強し。人の指南に就かざる仁なり。（『日録』延徳元・十一・十二）とこぼしている。剛毅果断というよりは頑固強情と評した方が適当かも知れない。彼は誠実のあまり時には頑固となり、しかも情の細やかな人柄であった。性恵童女の母が小祥忌辰布施に、鼓を春雨庵に寄進した時、

至哺人至鼓亦不見。余不覚怒、便止其斎。自爾以来、胸次鬱陶忽々不楽。実可笑。

と小事に拘るのを自嘲し、

昨日廿又九日（文明七・九・廿九）、人伝官軍不利之言、飛語紛々。（中略）蓋于山上于高野、無老無少皆党於賊、不有一人之知逆順之端者。不可不長大息矣。（中略）吉凶不可知而已焉。（『百衲襖』十六）

と東軍の勝敗に一喜一憂し、得意の易を以てしても、吉凶は不可知であると慨嘆する。

余自山居以来、動為山寒所侵、至春必病。以故畏寒如畏虎。（『百衲襖』廿三）

と、病弱の桃源は寒気におびえる。〃犬好きの人は陽気、猫好きは細心〃という巷説はともかく、彼は猫好きの人であった。

猫児在膝上、以舌為櫛々其毛。（同十二）

晩間病猫就死地。余手煨柴暖之、少焉遂死。可憐。雖然易之広大変通、陰陽易簡之道、於一小於菟上、亦可見而已。（同廿一）

易抄執筆中の愛猫の死は、桃源に〃易簡而天下之理得矣。〃の繫辞の文を想起させるのであった。近江を出て輋寺に住しても、彼の愛猫癖は続く。

崇寿に往き（桃源の）不例を弔ふ。桃源翁面談す。紙被を擁し猫児を抱き炉辺に在り。唐祖を髣髴たらしむ。（『日録』長享二・十二・廿二）

と、亀泉集証は猫を抱く桃源和尚の衰容に、唐祖を重ね合せて見るのだった。

文明十三年春、近江から帰京してからの『蔭涼軒日録』に写される桃源像は、当時の頽廃的禅林社会にどっぷり漬ったものだった。すなわち、看花の宴、聯句後・講筵後・禅客習後の宴など、社交的風雅に寧日なき有様である。文明十八年・十九年の二年間に限り、桃源が列席した詩会と聯句会を、『日録』から抽出して表記する。まず詩会（A表）、

月日	場所	題	参加者
(1)文明18.3.1	北岩蔵報恩寺	(看花宴)	詩衆廿五員＝横川、桃源、春英、春陽、景徐、功叔、彦竜、亀泉、雪溪、子竜、東雲、光甫、東川、文揔、景甫、元齢、以清、劉叔、希文、琴浦、茂叔、月船、春夢、竺英、秀峰。
(2)同 3.11	龍興軒	不明	横川、惟明、蘭坡、舜沢、喬年、蓂瑞、正宗、天隠、了庵（東堂九人）、桃源、高先、春陽、顕室、寿春、景徐、泰甫、亀泉（西堂八人）、平僧数十人。
(3)同 6.9	不定	了庵送行	横川、桃源、月翁、正宗、春陽、景徐、亀泉等。
(4)同 6.29	小補軒	(東雲兄七年)	横川、桃源、春陽、景徐、彦龍、梅雲。
(5)同 7.5	遊初軒	星夕前会新居	横川、桃源、春陽、仲璋、亀泉、景徐、功叔、彦龍、梅雲、元齢、葦洲、東雲、竺英、南嶺。
(6)同 11.16	陳外郎宅	午枕市声	桃源、天隠等。
(7)文明19.2.6	慈恩寺	持咒保梅	桃源等詩衆三十員。
(8)同 5.6	招慶院	風蒲蜻蜓図	横川、桃源、高先、寿春、景徐、泰甫、文揔、彦龍、梅雲、友竹、東雲。
(9)同 5.11	宜竹軒	雨後山蛍	横川、桃源、景徐、彦龍、東川、東雲、誠叔、梅叔、竺英等詩衆二十余員。
(10)同 5.17	寿徳軒	松風閣	惟明、横川、桃源、高先、泰甫、月翁、蘭坡、景徐、彦龍、桂林、亀泉、東啓、天用、九皐、遺孫、東雲、維俊、竺英、梅叔、潤英、勝英等。
(11)同 5.26	等持寺	招涼珠	横川、桃源、春陽、彦龍、亀泉、茂叔、南伯、文揔、春夢、友竹、竹圃、景雪、永年、春嶺、誠叔、竺英、東雲、清甫。
(12)同 7.7	勝定院	牽牛星	桃源、彦龍等。
(13)同 10.9	小補軒	江山之図	横川、桃源、亀泉。

これらは亀泉が同座し見聞して『日録』に記したものなので、偏りや聞き洩れ等があるのは当然であるが、桃源と亀泉とを焦点とする隋円形的詩壇のメンバーがわかる。即ち横川景三10、景徐周麟8、彦龍周興8、春陽景杲6、東雲景岱6、竺英有桂5（数字はA表の出席回数）が主な詩僧である。これらの僧と桃源との関係を略述しておこう。

横川景三は桃源と共に近江に戦火を避け、その細やかな交遊の情

は、『小補東遊集』に詳しい。景徐周麟は、〃翁(＝横川)与客聯句、必召〟予陪其席〃(書聯句後)、〃桃翁者予之所師事也〃(閑翁)というように横川と桃源の教えを受け、彦龍周興も〃(桃源)後遷勝定先廬、為亡友興彦龍講帝紀〃(漢水余波序)、〃亡友(＝彦龍)在日、従吾横川師而学道〃(彦龍知蔵遺藁序)と記されるように、横川・桃源両和尚に学んでいる。春陽景杲は〃余友春陽老人、公(＝京極政経)之瓜葛也〃(次匀京極源公見寄春陽詩序)と横川が記しているように、近江京極氏の一族なので、桃源の生家の主筋に当り、〃特嗜坡谷詩集、口吟手披〃(春陽和尚尽七日香語)は、春陽が東坡・山谷風の詩をよくした事を述べている。さらに秉筆衆をよく勤める東雲景岱と竺英有桂とは、それぞれ横川景三と亀泉集証に近侍する青年僧である。

A表(9)の日は梅雨空の天候であった。亀泉は横川・桃源・彦龍を招いて斎し、斎前に連句に興じた。句後の茶話の時、横川は、「今日は宜竹軒で談義があり、少衆(わかもの)を留めて詩会を開いているはずだ。今から皆で訪問すれば、景徐は喜ぶだろう」と蔭涼軒から宜竹軒に座を移し、詩会の後の宴は深更に及ぶ。この前年、徳政一揆は東寺堂塔を焼き、上杉定正は太田道灌を殺し、畿内も関東も不穏な状況であった。又この年四月、足利義政は七観音に義尚の病気平癒を祈り、病癒えた義尚は九月に近江に出陣する。かかる時期に、いかに塵世から超越した叢林とはいえ、詩句や酒宴に日を終る禅僧の姿は、京童の眼にどう映っていただろうか。

(13)は将軍義尚近江出陣中の詩会である。桃源の七言絶句を読んでみよう。

一八

閑挾蹇驢何処行　江山多入戦図横　尋僧若宿峯前寺　話到梅花許爾□(江山之図)

のどかにびっこの驢馬を連れて何処へ行くのか、　川も山も殆んど戦場になって目前に横たわっているのに。　僧を尋ねても峰の見える寺に泊るなら、　話題は梅花のあれこれに及ぶだろう。

結句の〃許爾□〃が解せないのがもどかしい。〃蹇驢〃から想起するのは杜甫である。義堂周信の「杜甫」(『空華集』十八)に、〃今覩兹画、風帽蹇驢、使人慨然〃とあるように、蹇驢杜甫像は五山文学僧によく知られていた。杜甫は、〃江山如有待　花柳更無私〃(後遊)〃風月自清夜　江山非故園〃(日暮)と、一点の私心もない江山を愛し、美しい江山に故郷を憶った。唐の曹松の〃沢国江山入戦図　生民何計楽樵蘇〃(己亥歳詩)の作は有名で、桃源は沢国たる近江の故里を想起して、乱世に流浪する杜甫の望郷の念に重ね合せて、承句を作ったに違いない。かく解すれば桃源の詩才も並々ではない。奇(く)しくも同日の『日録』(長享元・十・九)に、足利義政と近江麻雅里安養寺の義尚との次の応酬歌が記録されている。

坂本の浜路を出て浪安く養寺にありと答よ

やがてはや国治りて民安し養寺を立て帰らん

すると桃源の転句〃峯前寺〃は安養寺を念頭に置いての句で、当座性の強い興趣ある七絶である。

『日録』の筆者亀泉集証は、病気の苦痛を忘れる為、看病の弟子と句を連ねる程なので、聯句の記録が多い。桃源が参加した句会に限

り、詩会と同様二年間をB表にしてみる。言う迄もなく『日録』には左の他に桃源不在の句会も多く記され、桃源も亀泉の筆に載らぬ句会に出席している。

（B表）

月日	場所	句数	聯衆
(1)文明18.正.24	蔭涼軒	十六	横川、桃源、春陽、景徐、月桂、東雲、亀泉。
(2)同 3.2	養源軒	十六	横川、桃源、春陽、景徐、茂叔、春萼、廷材、東雲、亀泉。
(3)同 3.19	蔭涼軒		横川、桃源、春陽、景徐、東雲、亀泉。
(4)同 4.8	小補軒	十	横川、桃源、景徐、茂叔、亀泉。
(5)同 5.10	意足室	三十	横川、桃源、春陽、景徐、彦龍、東雲、明叔、亀泉。
(6)同 6.25	蔭涼軒	小聯	横川、桃源、春陽、亀泉。
(7)同 6.29	仝右	六	桃源、春陽、亀泉。
(8)文明19.2.6	仝右	十	桃源、天隠、東雲、慈藤、竺英、亀泉、茂叔、悰子。
(9)同 3.14	崇寿院	八	横川、桃源、天隠、春陽、月翁、古雲、亀泉。
(10)同 5.11	蔭涼軒	二十	横川、桃源、彦龍、慈藤、竺英、茂叔、亀泉。
(11)同 5.21	仝右	三十	桃源、春陽、東雲、亀泉。
(12)同 5.29	相国寺浴室	十	横川、桃源、彦龍、亀泉。
(13)同 6.2	崇寿院	二十六	横川、桃源、正宗、東雲、梅雲、亀泉。
(14)同 6.6	勝定院	十	桃源、春陽、子英、亀泉。
(15)同 6.26	崇寿院		横川、桃源、景徐、東雲、亀泉。
(16)同 8.11	蔭涼軒	小聯	桃源、彦龍、茂叔、慈藤、竺英、亀泉。
(17)同 10.10	小補軒	十六	横川、桃源、春陽、彦龍、梅雲、東雲、竺英、亀泉。
(18)同 閏11.9	勝定院	百	桃源、彦龍、友竹、仙友、口叔。

養源軒（軒主は修山清謹）を除き、聯句会は殆んど横川（崇寿院・小補軒）亀泉（蔭涼軒・意足室）桃源（勝定院）の三人の居所で開かれていて、三人の風雅の交わりが深かった事を示す。亀泉17は別格として、横川景三12、春陽景杲10、東雲景岱9、景徐周麟6、彦龍周興6（数字はB表の出席回数）の主要メンバーは、詩会の常連と変りはないが、聯句会の方が開会回数が五回も多いのに、聯句衆二十二人は詩衆五十七人に比しずっと少ない。これは聯句の方が内輪の私的な閉鎖的団欒であった事を示している。〃枕を呼んで楽しむ〃（長享二・六・廿八）と記していて、座敷に横臥して句を聯ねる事もあったのである。作品二つ（(10)(17)）を読もう。

文明十九年五月十一日、天降雨。崇寿・勝定（桃源）・彦龍を招き斎す。宜竹翁は□安寺斎会に赴きし故之を請せず。斎前に句を聯ぬ。

慈藤　迎客送梅雨　客を迎え　いやな梅雨を送り出し、

崇寿　問禅答栢時　禅の本旨を問うと　客は「栢時」*と答えた。

*『無門関』の〃趙州因僧問「如何是祖師西来意」州（答）云「庭前栢樹子」〃に拠る。

有桂　簷閑無一鳥　のきは静かで一羽の鳥*もいない。

*李頎詩〃野鶴宿簷際〃の如く、簷先の鳥はよく詠われる。

勝定　巣穏有千亀　（蓮の上の）巣には多くの亀がいる。
＊『史記』亀策伝に、むかし芳蓮の上に多くの亀が巣くっていた事を記す。
彦龍　雪藕代涼具　蓮を洗って涼具（団扇）の代りにし、
集樹　湘茶当午炊　茶を煮てひる仕度をする。
崇寿　枕中吾楽土　枕すればわしは極楽気分、
亀泉　□下孰生涯　□の下にどうして一生を送る事があろう。
彦龍　先竹衆皆酔　竹葉（酒）を飲まずして　聯衆は皆うっとり、
＊先竹は「宜竹景徐が来なくても」の意も含む。なお、「酔生夢死」により前句に付く。
集樹　後蒲五巳移　端午の節句がすんで五日もたった。
勝定　塔存皈仏□　塔は厳然として　人々は仏教に帰依し、
彦龍　里近効顰施　俗里が近くにあり、村人は人真似ばかり。
＊『荘子』天運に、美人の西施に効って眉を顰める醜女の話がある。
亀泉　山掃春呉黛　山は春の呉姫のまゆずみの如く美しく、
＊越女の西施に呉姫を付ける。
彦龍　花嫌夜虢脂　花は（自然のままが美しく）夜の脂粉を嫌う。
＊揚貴妃の姉の虢国夫人は化粧せずに天子に朝した。

筆者は解釈学こそ文学研究の基礎と思っているが、聯句は解釈困難な文芸の一である。勝定院主桃源瑞仙の句はいかにも彼の人柄をよく表している。竺英有桂に付けた第四句は、『史記』『易』の深い学識から口をついて出たものだろうが、〃千亀〃はもちろん主催者の亀泉を祝

う語である。また仏道のぶの字も忘れた文学僧の中で、第十一句は異色で（異色である事が実は異常なのであるが）、彼の本来の面目を堂塔に形象化している。余談だが、彦龍周興の付句も巧みである。第五句の巣亀―芳蓮―藕葉―涼具（団扇）の連想は古典的美の爽かさを感じさせ、第十四句は艶詩にころげ堕ちようとするのを、さりげなく支えている。

長享元年十月十日、天快晴。小補軒斎に赴く。桂公（竺英有桂）同途。茂叔は江州に赴きし故赴かず。（中略）

東雲　菊与梅前後　菊が枯れた後　梅雲が来訪し、
同　君来偶小春　貴僧のおいでの日はたまたま小春日和。
亀泉　雲於松上下　雲は松の上下にたなびき、
＊東雲は松泉軒（亀泉の居所）によくお出ましになり。
同　我約幾良辰　拙僧は何度もよい時節の訪問を約束する。
有桂　吟入風流社　詩を吟じて　風流の友社に入り、
小補　恭臨寂寞浜　恭しくわびしい浜辺（小補軒句会の自遜）に臨む。
同　及鷗恩似海　（無心の）鷗にまで及ぶ恩情は海のように広く
＊『列子』黄帝篇の故事より転じて、①鷗を友とする隠居（小補軒に幽居する横川）②浮世外の風流の交りを海浜の鷗に喩える。
春陽　作蝶夢尋隣　蝶となり（物我の境を忘れ）夢に隣軒を訪ねる。
桃源　冬暖黄綿襖　綿入れの黄色い上衣を着ると　冬でも暖かい。
＊冬の太陽を「黄綿襖」という。この日は快晴。なお『百衲襖』

を連想させる。
彦龍　天高烏角巾　高く晴れた空の下　黒頭巾の隠者、
＊杜甫「南隣」に〝錦里先生烏角巾　園収芋栗不全貧〟があり、詩聖杜甫を髣髴とさせる。〝隠者〟〝園〟から次句が付けられる。
梅雲　帰歟園日渉　さあ帰ろう。田園は日がたち趣を成しただろう。
＊陶潜「帰去来辞」の〝園日渉以成趣〟に拠る。
桃源　美矣膳時新　うまい！　料理は調理したばかり。
＊前日の『日録』に〝小補約云。「来立可調三菜斎」〟とある。
小補　一顆洞庭橘　一箇の柑橘は洞庭産です。
＊韋蘇州「寄橘」に〝書後欲題三百顆　洞庭須待満林霜〟とあり、洞庭の橘は霜のあと美味に熟す。斎膳に蜜柑があったのだろう。
亀泉　千秋楚国椿　千年も生きるのは楚の椿。
＊『荘子』逍遙游の〝楚之南有冥霊者（中略）上古有大椿者（中略）八千歳為秋〟に拠る。洞庭湖は呉楚を分つので前句に付く。
彦龍　戎衣砧擣月　軍服を濯う砧は月をつくようである。
＊李白「子夜呉歌」の〝長安一片月　万戸擣衣声〟に拠る。
春陽　聖詔服離塵　詔勅により服（兵士）は戦塵を離れた。
＊離塵服は袈裟のこと。前日の『日録』に〝晩来以丹公報横川南禅一級之御免之事〟とあり、小補軒の横川は南禅寺即ち紫衣（離塵服）の勅許があった。

はじめの四句は隔句対で、前掲作には無かった作法である。桃源の句は素直で説明の要はあるまい。第十一句の〝園日渉〟は、「庭園を毎日散歩すると（小走りになる）」という解釈もあるが、桃源は、「畠は日がたつにつれ、手入れされて風情が生じる」と解している。

聯句二例のみをあげたが、〝菊与梅前後〟〝聖詔服離塵〟の如き「即時性」、〝雲於松上下〟のような「即座性」、〝一顆洞庭橘〟〝戎衣砧擣月〟などの「典拠性」悪く言えば「衒学性」、さらには〝黄綿襖〟〝離塵服〟の「奇抜性」、〝鷗〟〝蝶〟〝烏角巾〟〝帰歟〟のような「超俗性」、そして〝美矣〟〝千秋椿〟〝聖詔〟に見られる「祝福性」などの句を付合せていって、彼等中世禅林詩人は、複合的重層的な美的情趣を、塔頭寮舎の四畳半的私的団欒の場で楽しんでいたのだった。

前夜より勝定の桃源和尚不例。（『日録』長享二・八・七）

というように、長享二年秋より桃源は病気勝ちになるが、小康を得ると詩宴に出たりした。しかし、

崇寿に往き不例を弔ふ。桃源翁面談（長享二・十二・廿二）。

崇寿院主昨夜より不例。背に灸し臥する処へ行き面す（長享三・四・十七）。

崇寿桃源不例により紙形に写す（頂相（ちんぞう）を描く）べき由、景徐翁より命あり。乃ち昌子（＝盛文慈昌）を狩野助宅に遣す（長享三・五・廿八）。

周囲の者も桃源の終焉を覚ったらしく、狩野正信に肖像画製作を依頼し、桃源は十月二日崇寿院を退くと、同月廿七日寅刻遷化した。了庵桂悟の悼詩をあげ、本稿の結びとする。

閻浮界上暫時人　何隔前鋒与後塵　欲問来源無別路　桃花流水幾回春

この世に暫らく生を享けている人間は　先鋒と後駆けとに隔てはない　（父母未生以前の）大もとを問うても答えは別段変ったことは無い（桃花林の源を尋ねても特別の道はない）　桃の花は毎年春になると水に浮んで流れ去るのだ。

言う迄もなく陶淵明「桃花源記」を踏まえての悼詩だが、李白「山中問答」の次の傍点の字句も巧みに取り入れている。即ち、〝問余何意棲碧山　笑而不答心自閑　桃花流水杳然去　別有天地非人間〟。李白は人間世界とは別天地の閑かな山中の生活を〝桃花流水〟に象徴したが、了庵桂悟は色即是空・空即是色、現実の仮の世界イコール真実の世界を〝桃花流水〟にうたうのである。桃花流水の世界と桃花源とは、隔絶した郷ではなく、〝眼横鼻直〟〝花紅柳緑〟の絶対肯定の境である。現実（桃花流水）を超えた所（桃花源）に真実が在るのでなく、具体的現実が真実であり、真実が具体的現実なのであり、絶対的事実そのままがあるのみである。桃源瑞仙は示寂後も、生前と同じ道を歩み続けている――と了庵和尚は詠っている。

注(1) 市村及び慈雲庵について、横川景三は『小補東遊集』に次のように記す。随余友桃源、避寇江之市村。市村之距瑞阜（永源寺）也、僅五里余、其地乃小倉源公（実澄）之封内也。（菊後話梅）
市村者乃京極氏封内也。（移居瑞阜龍門庵）
桃源郷寺慈雲監院（中略）比暮到慈雲庵。（無題）

(2) 清文堂刊『続抄物資料集成』に『日本書紀桃源抄』が収められている。

神道に疎い筆者は単純に表題を信じていた。桃源の『史記抄』（史記源流）に、〝本朝亦有史。始自天神地神而及人王、言其神道也。（中略）殆乎似読補史記〟とも記しているので、筆者は桃源の神仏一致思想を探るべく読んでみた。しかし随所に『易』を引き、〝小補日〟と横川景三の説を書き入れて、五山僧と無関係ではないが、内容は吉田家の神道説で桃源の思想ではなかった。

(3) 『梅花無尽蔵』に、〝春雨庵桃源和尚、与某梅子（＝萬里集九）同入萬年之社而目無全牛〟とか〝余（＝萬里）始入社、横川・桃源為同年〟（『太平雀』）とある。

(4) 室町時代の書籍商の具体例として文恩を紹介しておこう。亀泉集証は『蔭凉軒日録』に、蔭凉軒に出入した売書漢文恩を屢々書き記している。彼は正月には薄鳥子一帖を持って蔭凉軒に歳賀に来るのが恒例であった。〈長享二・正・十。同三・正・廿。延徳三・正・十一。同四・正・九。明応二・正・十一〉。時には『皇元風雅集』『無註金剛経』『王徴士詩集』『大明皇后内訓』を亀泉に贈呈している。これに対し亀泉は彼の為に『黄山谷集』『風雅集』『広韻』等の外題を書いてやったり、東福寺仏母院の安首座の瑞世（住持登用）の文恩の頼みに尽力してやったりしている〈延徳四・三・十二〉。文恩は又、観音占によって亀泉の運勢を占うこともあった〈延徳二・二・十〉。萬里集九は彼の為に〝売書野老面非春〟と七絶を送っているが、延徳三年に六十六歳であった。

(5) 芳賀氏は『百衲襖』五の識語〝日本ノ大外記環翠老人清三位（中略）余皆陪其講筵〟を推論の根拠にするが、これは『史記抄』孝文本紀によると『礼記』の講筵である。

(6) 『蔭凉軒日録』〈長享二・十二・十六〉に、〝愚云「大亨和尚其人如何」。蘭坡云、「開山（夢窓）直弟也。精易。大亨小師玉潭、々々小師桝室代々伝易。易家伝也」〟とある。即ち、大亨妙亨―玉潭中湛―桝室周馥の法系は易学を伝えていた。

(7) 『蔭凉軒日録』（延徳四・正・四）に、〝翁（景徐周麟）話云「桃源和尚在世時、年々年始十ケ日、以十題作詩」〟とある。